

ファン行動と自己愛傾向からみた大学生の幸福感に関する検討

○市貴恵・安藤美華代

(岡山大学大学院 社会文化科学研究科)

問題と目的

主観的幸福感の向上を促す活動の1つとして、ファン行動が考えられる。小城(2002)は、ファン対象が好きな理由として「人生の目標」「生き方を尊敬している」といった同一視があることを報告している。積極的にファン行動を取っているファンは、ファン対象の成功を自分自身の成功のように感じ、満足感を得ているのかもしれない。一方で、小此木(1981)は、自己愛者は自分の延長物と見なす相手に対して主観的な一体感や愛情を感じており、自身の自己愛的欲求を満たそうとしていると述べている。ファンは、尊敬しているファン対象を同一視することで、自己価値を肯定的に維持しようとしているのかもしれない。ファン行動を起こす要因には、自己愛の心理が関連しているのではないだろうか。そこで本研究では、ファン行動の積極性と自己愛傾向からみた大学生の幸福感との関連について検討することを目的とする。

方法

調査対象者 大学生・大学院生 102名。この内、ファン対象の有無の問いに対して「いない」と回答した者を除く 97名を分析対象者とした。

手続き 2023年2月～9月にGoogleフォームによるWeb上調査にて実施した。個人を特定しないことや回答の自由、論文発表といった倫理的配慮について、アンケートの概要欄に記述し、提出をもって同意とみなした。本研究は、所属学科の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:社_2022_25)。

調査内容 ①フェイスシート(年齢、ファン対象の有無、ファン対象のジャンル、ファン対象の性別)、②ファン行動尺度(向居・竹谷・川上・川口, 2016)、③自己愛人格目録短縮版(小塩, 1999)、④主観的幸福感尺度(伊藤・相良・池田・川浦, 2003)から構成した。

結果と考察

調査対象者の内、95.1%の者が分析対象者となっており、多くの者にファン対象がいることが示された。

ファン行動と自己愛傾向及び主観的幸福感との関係を詳しく見るために2要因の分散分析を行った。ファン行動の積極性と自己愛傾向の得点の平均値から分析対象者の群分けを行った(平均値以上を高群、平均値未満を低群)。そして、ファン行動の積極性の高低と自己

愛傾向の高低から、4つの群に分類した。続いて、主観的幸福感の(合計)と4つの下位尺度(人生に対する前向きな気持ち・自信・達成感・人生に対する失望感のなさ)ごとに、ファン行動の積極性と自己愛傾向を要因とする2要因の分散分析を行った。その結果、自己愛傾向の主効果は、主観的幸福感の(合計)と4つの下位尺度いずれにおいても有意であった($p < .01$)。すなわち、ファン行動の積極性の程度に関わらず、自己愛傾向が高い者は主観的幸福感が高いことが示された。また、主観的幸福感(自信)のみ、ファン行動の積極性の主効果がみられた($p < .05$)(図1)。すなわち、自己愛傾向の程度に関わらず、積極的にファン行動を取っている者は、主観的幸福感(自信)が高いことが示された。

以上の結果から、人生を豊かに生きていく上で、自己愛は重要な役割を担っていることが考えられた。また、ファン心理と心理的健康の関連を報告する先行研究は見られるが、ファン行動と心理的健康との関連を示す先行研究は見当たらない。ファン対象への気持ちの面だけでなく、ファン行動を取ることも心理的健康の維持に意味があることが示唆された。

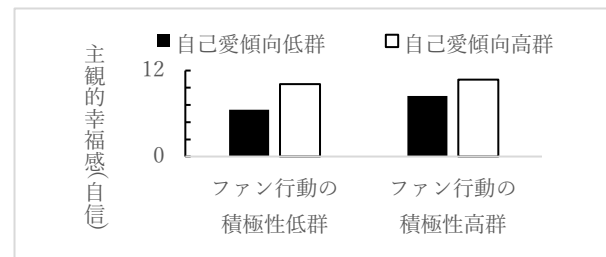


図1 ファン行動の積極性と自己愛傾向が主観的幸福感(自信)に及ぼす影響

主要引用文献

- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003) 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74, 276-281.
- 向居暁・竹谷真詞・川上明美・川口あかね (2016) ファン態度とファン行動の関連性 高松大学・高松短期大学研究紀要, 64・65, 233-257.
- 小塩真司 (1999) 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, 8, 1-11.

利益相反

本研究に関して開示すべき利益相反関連事項はありません。